心理的援助の専門家への援助要請における諸変数間の関連

○永井智¹・小池春妙²

(¹ 立正大学心理学部・² 名古屋大学大学院環境学研究科)

キーワード: 援助要請, 被援助志向性, 態度

Relationship among Factors of Seeking Professional Help

Satoru NAGAI¹, Harumi KOIKE²

(¹ Faculty of Psychology, Risho University, ² Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University)

Key Words: help-seeking, help seeking preference, attitudes

【 目 的 】

深刻な問題を抱えた際に、専門家など他者に援助を求める行動を援助要請行動と呼ぶ (DePaulo, 1983)。海外では、専門家への援助要請意図の規定因を明らかにするための研究がこれまで多く行われてきた。先行研究においては、Theory of Planed Behavior (Ajzen, 1991)などを理論的背景として、実際の援助要請行動の予測子として援助要請意図が、そして援助要請意図の主要な規定因として援助要請に対する態度が想定されている (e.g., Vogel, Wester, Wei, & Boysen, 2005)。

しかしながらわが国では、援助要請における意図や態度について十分な検討が行われているとは言いがたい。そこで本研究では、まずこの援助要請に対する態度と意図に注目し、援助要請に関する諸変数との関連を明らかにするための基礎的調査を行う。関連を検討する変数としてはまず、援助要請期待と援助要請不安 (中岡・兒玉, 2011)に注目する。加えて、先行研究において検討されることの多い、被援助志向性と、心理的援助の専門家の利用経験、性別との関連も併せて検討し、相互の関連を明らかにすることを目的とする。

【 方 法 】

対象 大学生 238 名 (男性 84 名, 女性 154 名)

質問紙の構成 ①援助要請に対する態度: Attitudes Toward Seeking Professional Help Scale 短縮版 (Fisher & Farina, 1995)の邦訳版 (小池・伊藤, 印刷中: 10 項目 4 件法)②援助要請意図: 木村・水野 (2004)の被援助志向性に関する 6 項目 5 件法 ③援助要請期待: 援助要請期待尺度 (中岡・兒玉, 2011: 21 項目 5 件法) ④援助要請不安: 援助要請不安尺度 (中岡・兒玉, 2011: 18 項目 5 件法) ⑤被援助志向性: 被援助志向性尺度 (田村・石隈, 2001: 11 項目 5 件法) ⑥心理的援助の専門家の利用経験: 利用経験を 2 件法で尋ね、利用してよかったこと、悪かったことをそれぞれ 1 項目ずつ 5 件法で尋ねた。

【 結 果 】

性別および過去の利用経験による差の検討 援助要請に対する援助要請意図、および、援助要請期待と援助要請不安の各下位尺度をそれぞれ従属変数として、性別 (2)×専門家の利用経験 (2)の 2 要因分散分析を行った。その結果、援助要請態度 ($F(1, 234)=6.08, p<.05; Mean=27.58, SD=4.25$ vs. $Mean=26.01, SD=3.86$)と援助要請意図 ($F(1, 234)=17.68, p<.01; Mean=14.80, SD=5.81$ vs. $Mean=10.97, SD=4.56$)については、利用経験のある群の方が、利用経験のない群の得点よりも、態度と援助要請意図の得点が高かった。性別の主効果 ($F(1, 234)=0.01\sim2.47$)および性別×利用経験の交互作用 ($F(1, 234)=0.01\sim1.72$)は、いずれも有意ではなかった。

各変数間の関連の検討 続いて、各変数間の相関係数を算出した (Table 1)。その結果、援助要請に対する態度と援助要請意図は互いに有意な正の相関を示した ($r=.26, p<.01$)。また、援助要請に対する態度は、援助要請期待における内面安定期

待および専門的援助期待、被援助志向性の 2 つの下位尺度、専門家利用の際のポジティブな経験との間に有意な正の、援助要請不安の 3 つの下位尺度全てとの間に有意な負の相関を示した。また、援助要請意図は、援助要請期待における内面安定期待、依存的解決期待、知的学習期待との間に有意な正の、援助要請不安におけるスティグマへの懸念とカウンセラーの対応への懸念との間に有意な負の相関を示した。

その他、援助要請期待の各下位尺度、援助要請不安の各下位尺度、被援助志向性の各下位尺度、専門家利用の際の各経験は、概ね互いに理論上想定される方向で有意な相関を示したが、援助要請期待における、依存的解決期待と知的学習期待のみ、他の変数とほとんど有意な相関を示さなかった。また、専門家利用の際のポジティブな経験と援助要請不安の各下位尺度との間にも、有意な相関は見られなかった。

【 考 察 】

過去の利用経験と態度や意図との関連は、先行研究の結果 (Deane, Skogstad, & Williams, 1999)と概ね一致するものであった。一方性別については、態度や意図と有意な関連が見られなかった。先行研究で指摘されている通り (永井, 2010), わが国では、専門家への援助要請には、明確な性差が存在しない可能性が考えられる。

相関分析の結果、各変数は概ね概念から想定される理論通りの関連が示された。しかし、意図と態度との相関をはじめ、各変数間の相関は全体的に弱いものであった。これには、援助要請意図の測定における得点分布の偏りなどの問題が存在している可能性が考えられるため、今後さらなる検討が必要であると考えられる。

Table 1 各変数間の相関係数

		援助要請 態度	援助要請 意図	
全サンプル (N=238)	援助要請 期待	内面安定期待	.22 **	.13 *
		専門的援助期待	.21 **	.10
		依存的解決期待	.05	.15 *
		知的学習期待	.00	.17 **
	援助要請 不安	スティグマへの懸念	-.20 **	-.15 *
		強要への懸念	-.18 **	-.04
		カウンセラーの対応への懸念	-.22 **	-.16 *
	被援助 志向性	援助に対する欲求と態度	.26 **	.17
援助に対する抵抗感の低さ		.13 *	.02	
専門家 利用経験者 (N=45)	専門家 利用経験	ポジティブな体験	.55 **	.27
		ネガティブな体験	-.20	-.25